

出会い (23)

宋 遼 禪 師 (続)

奥村 一郎

3. 蟬時雨

毎年のように、一度は老師を訪れる習慣になっていたが、ある真夏に三島の龍澤寺を訪ねた時のことが思い出される。そのころ、三島のカトリック教会の主任司祭をしておられたフランス人のメイヤー神父も同行、それに、中年の信者2人がいっしょについてこられた。いつものように、ごぜんまりした庭園に面した茶室に私たちを迎えてくださった。

そこでは、すでに、老師を中心に囲んで4つの大きな座布団がきちんと並べられていた。互いに挨拶を交わしながら、しばらく話がすすむ間に、茶道の師匠でもある老師が私たちひとりひとりに丁寧に茶をたててくださった。和やかなその一時が今も懐かしく思い出される。

ところで、その時、ちょっとひょうきんな新聞記者のYさんが急に話の流れを変えるような質問を出した。

「私たちのカトリック教会では、このごろ、急に変わって、今まで長い間使ってきた古いラテン語をすっかり捨てて、日本語だけで祈るようにと、お上のパチカンから指示が出ました。まことにありがたいことで、皆大喜びです。以前は、私たち日本人にはチンプンカンプンのラテン語で、さっぱり、言葉の意味が分からず、舌もまわらず、頭が痛いばかり、祈りの心も窒息してしまいました。ところで、禅寺では、『ナムカラタンノトラヤーヤ』というような、わけの分からぬお経を、まだ、唱えておられますか?」

いかにも、正直な質問とはいえ、それまでの穏やかな有り難い話し合いに、いきなり、冷や水をぶっかけられたみたい。一瞬、私たち、皆赤面、その不躰な質問に基だ当惑、目を伏せて黙ってしまった。しかし、老師は、少しも気を悪くされた様子もなく、落ち着いて口を開かれた。

「あなたには、蟬の声が聞こえるかな?! ああ、凄まじいまでの蟬時雨の声が?!」

なるほど、ふと思えば、皆、話に気をとられて、森を覆うような蟬時雨の声には気づかずにいたことに、あらためて気づかされた。老師はさらに力強い声でまた言われた。

「あの蟬の声! 蟬は命の限り鳴いちゃう。大空に向かって森が燃え上がるかのような命の叫びじゃ! 祈りとはあの蟬時雨のような人間の命がけの叫びじゃ。神も仏も、人も自然も全く一つになって



歌う宇宙讃歌じゃ! それこそ、ナムカラタンノトラヤーヤじゃ!」

これには、だれも無言。そこには祈りの源泉そのものが示されているように思えた。

意味の分からない言葉の祈りよりも、分かる祈りのほうがよいことは確かである。そのほうが「祈りの心」がよく伝わる。しかし、言葉の知的理解は、しよせん祈りに関する限り二義的である。学者であればよく祈れる、というものではない。まことに祈れる人というのは、神を愛し人を愛することを知る人のことである。キリスト教的祈りの本質は、それ以外のところにはない。著名なスペインの聖女テレジアは言う。

「祈りで大切なのは、多く考えることではなくて、多く愛することです」

老師は愛という言葉は用いない。命の叫びと言う。キリスト教においては、愛は命、それも永遠の命、すなわち神と同義語である。

4. 敵なんかない

美しい富士山の裾野で、丸1ヵ月、25名ほどの修道女と大黙想をしたことがある。その最後の日、三島の龍澤寺の宋遼老師をお訪ねした。大変喜んでくださって、本堂や座禅堂も、質素で自然なたたずまいのなかに、澄んだ修道の香りが感じられるところは昔と変わらなかった。私にとって昔といえ、1948年6月28日夜の対面の時である。「あなたは、今、キリスト教をよく分かったと思う。しかし、まだ、頭で分かっただけだ。体で分かなければならない。体で分かるためには洗礼を受けなさい」と言われ、全く予期しない引導を渡された時のことである。今も、その時、その場はいつも眼前にあり、その言葉を忘れることはできない(「出会い」第6回参照)。

そこで、案内された本堂では、老師のご希望で、名曲グレゴリアンの聖母讃歌「サルベ レジナ」を、シスターたちがきれいに歌い終わると、後ろから、老師が力強い声で「アーメン」と結ばれたのにはひととき感動。

さて、お別れするところになって、いっしょに広間でお茶をいただきながら話を聞いていた時、老師がつぶやくように言われた言葉も忘れられない。

「キリスト教は「敵を愛しなさい」と言いますな? 敵なんかない

奥村 一郎 / おくら・いちろう

1923年岐阜県生まれ。

48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年より2001年までバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。現在、京都聖母学院短大名誉教授。

著書は、『断想』『主とともに』『祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンズ宗教研究所)など多数。

んですよ!」

まるで遺言にも似た一言を残された。急に難しい問題を突きつけられたよう。どうして、お別れの時に言われたのか、今にしても、私には分からない。他の参加者も、それなりに、ショックだった様子。

たしかに、福音書には愛敵をすすめる言葉がある。マタイ5章43 - 48節と、ルカ6章27 - 36節に明記されている。事実、このキリスト教を越える鋭い禅的発想は、すでに、世界的に著名な鈴木大拙博士の言葉があったが、おそらく、宋濤老師も知っておられたのであろう。この禅仏教の霊性とキリスト教の霊性との接点における大問題は、臨済禅での大疑団(*)ということができよう。ここでは、読者の方々のご意見もお聴きしたい。なぜなら、人間の幸不幸を分かつ根源は「愛」の問題にあるからである。宗教の真偽が問われるのも、そこにある。にもかかわらず、宗教が強固であればあるほど、悲惨な戦争や対立をもたらす現実をどのように考えてよいのか。「人間、これ矛盾せるもの」と言われるだけでなく、「宗教、これ矛盾」と言うしかない。

キリスト教では「原罪」、仏教では「無明」という暗い場がある。いずれも、愛と慈悲に包まれた天国や極楽浄土とは、およそ裏腹の世界である。この地上の哀れな人間の理不尽を、どのようにして担って生きることができるのだろうか。黙してひざまづくしかない。

(*) 禅者に求めらる3つの心構えの1つ。「疑い多きところに真理多し」という語があるが、それをさらに徹底した禅修行の心構え。

P.G.I.のお知らせ

- ・ バート・グリン 写真展 Burt Glinn "HAVANA"

2002年10月16日(水) - 11月29日(金)

1959年1月1日に、マグナムの写真家バート・グリンはキューバのハバナに飛んだ。

大晦日のパーティーで話題になっていた、バティスタ大統領が亡命する話に彼は直観的に反応し行動に移したのだった。このことがキューバ革命を目の当たりにし、若き日のフィデル・カストロとの出会いとなった。それから42年後の2001年1月10日にキューバで、「10日間の出来事」をまとめた写真展を開催した。そしてこの時に彼はカストロとの再会を果たした。

これを機に写真集「HAVANA」が刊行され、世界中で巡回展を行うことになった。

本展ではカストロ氏の雄姿を中心に60余点を展示。

- ・ 2002年12月3日(火) - 20日(金) 常設展

チャリティー写真展のご報告

フランコ・メノン写真展「ベシャワール・アフガンへの門戸」(7月22日 - 8月9日)は盛況のうちに無事終了いたしました。

多くのみなさまにご覧いただいた上、チャリティーへご協力いただき誠にありがとうございました。尚、作品の売上の一部を「ベシャワール」の医療活動及び難民救済活動のための支援金とさせていただきます。

フォト・ギャラリー・インターナショナル

東京都港区芝浦 4-12-32 TEL.03-3455-7827 FAX.03-3455-8143

JR田町駅芝浦出口(東口)より徒歩10分 [入場無料]

【営業日】 月 - 金 【休館日】 土・日・祝日

【営業時間】 11:00 - 19:00

* P.G.I. についての詳しい情報はホームページ (<http://www.pgi.ac>) をご覧下さい。

表紙の言葉



写真「クリス・スティール」バーキンス
アフガニスタン、1996年
写真提供: マグナム・フォト東京支社

カブールの北、迫撃砲が飛び交うなか、位置につく反タリバン軍の義勇兵

「...山やまがぐるりを囲み、わたしたちがその中心にいる。もやの多いイギリスでは、これほど多くの星を見たことがない。わたしは果てしない天空の輝きを存分に見ようと、あおむけに寝ころがった。今、この下には破壊された村があり、たくさんの死者と家族を失った人びとが横たわる。それなのになんと壮大な、胸が痛くなるような輝きだろう。わたしは思った、いつか、この国に平和が訪れたら、この厳しい土地が緑でおおわれる春の季節に、息子たちを連れてこの場所に来よう。ロバを借りて、このあたりの村を順にめぐってみよう。こんなふうにあちこちの村に滞在して、村人たちと食事をともにし、お茶を飲もう。いつの日にか...」

写真集「アフガニスタン」クリス・スティール＝バーキンス(晶文社刊)より